

ラジオドラマ用オリジナルシナリオ

One Shot Story Series

「シンデレラロード（第1話）」

作・牛

《キャスト紹介》

男性客	・・・	伊藤寿浩（27才） 放蕩息子。
女性客	・・・	香住華子（24才） 寿浩のフィアンセ。
マスター	・・・	女性バーテンダー。

《 舞 台 》

港が近くにあるBAR「サンドリオン」。
店内には常にジャズが流れている。

(PLAY 1)

S E ドアの開閉の音

マスター : いらっしやいませ。
女性客 : こんばんわ、マスター。
マスター : お久しぶりです。
女性客 : マスター、紹介します。私の婚約者の伊藤寿浩さん。
男性客 : 始めまして、伊藤です。
女性客 : 始めまして。お噂はかねがね香住様の方からお伺いしております。
男性客 : おいおい、変な事は言っていないだろうな？
女性客 : 大丈夫よ。ねえマスター。
マスター : とても素敵な方だと何度となくお聞きしております。
女性客 : ねえ。
男性客 : そんな、素敵だなんてちょっとオーバーだよ。
女性客 : 彼、照れてるんです。
男性客 : おい・・・
マスター : どうぞこちらへ。
女性客 : ありがとう。
男性客 : どうも。
マスター : お飲み物、何にいたしましょうか？
男性客 : 俺はこの後運転するから・・・
女性客 : 少しくらいなら大丈夫よ。ねえちょっとだけでも飲みましょ
うよ。
男性客 : そうだな・・・
女性客 : それにイザとなれば私が運転するわ。
男性客 : 判ったよ。それじゃレッド・アイをお願いします。
女性客 : 私はテキーラ・サンライズ。
マスター : かしこまりました。

(PLAY 2)

女性客 : マスター、私達の結納の日が決まったんです。
マスター : それは、改めておめでとうございます。
男性客 : ありがとうございます。
女性客 : でも、私まだ夢を見ているようで・・・
男性客 : またそれを言う・・・
マスター : どうかしたのですか？
男性客 : いえ、彼女変な事を気にしてるんですよ。
女性客 : 変な事なんかじゃないわ。
男性客 : いえね、その、俗に言う家柄だとか身分とかって、すぐに口にするんですよ。
女性客 : 変な事ですか。神戸の伊藤商事って言えば、マスターもよく知ってましたよね？
マスター : それはもう、伊藤商事の伊藤忠介様と言えば神戸貿易の開祖と言われるぐらい、神戸の貿易に貢献なさったお方。
男性客 : 爺さんがどんな偉い事をしたのかと、俺が何をするかは別問題だろ。
女性客 : ゆくゆくは彼が今の伊藤商事を継ぐのです。
男性客 : ああ、最近決めたんだけどな。
女性客 : 彼、会社なんか継ぐ気はないと3年も家を出てたんです。
マスター : お気持ちが変わったのですね。
男性客 : ええ、それが彼女のお陰なんです。
マスター : 彼女の？
男性客 : あれ、そのことはまだ話してなかったの？
女性客 : う、うん・・・
男性客 : 説教されたんですよ俺、こいつに。
マスター : お説教を？
男性客 : ええ、こっぴどく。

(PLAY 3)

男性客 : 華子との出会いは僕が交通事故で入院した病院だったんですよ。
マスター : はい、それはお伺いしております。

男性客 : 彼女は僕の病室の担当看護婦でした。入院と言っても足を骨折しただけで後は健康体なんですよ。だから毎日が退屈で退屈で・・・

マスター : 判ります。

男性客 : 2週間ほどでした。華子とよく喋るようになったのは、な。

女性客 : うん。彼はナースセンターでも話題だったんです。背も高くハンサムだから若いナースの間で・・・

男性客 : ほんとか？

女性客 : 本当だってば・・・だから彼と親しくしたら他の同僚からなんか言われなかつたかと思つて、最初の内は・・・

男性客 : 担当のくせに妙に無視するもんだから、よけい喋り掛けたくて・・・そのうち喋ってくれるようになり、だんだんと会話がはずむようになっていった。

女性客 : うん。

男性客 : 僕はあまり家の事は他人に話さない方だけど、彼女には全部話したんですよ。家を飛出して放蕩な暮しをしてると。すると、彼女に言われたんですよ。それは親に反抗してただ逃げてるだけだと。

女性客 : だからあの時はそんな有名な会社の跡取り息子だなんて知らなかつたから・・・その辺の町工場かなんかのドラ息子くらいにしか思わなかつたのよ・・・

男性客 : 基本的には一緒だよ。一見カッコ良く見えるけど、親の実績を超えられる自信がないだけだとも言われちゃつたんです。

女性客 : ごめんなさい、あの時は・・・

男性客 : いいんだよその通りだつたんだから・・・

(PLAY 4)

男性客 : 彼女に言われて眼が覚めたんですよ。よし、祖父と親父が残した実績を俺が越してやろうって・・・

マスター : そうですか。

男性客 : そう思つたとたん、エネルギーが漲つて来て、退院を待たずに実家に帰りましたよ。親父とお袋、驚いてたな。

女性客 : そりゃそうでしょ。3年も家を空けてた息子が急に帰って来たんだから。

男性客 : それも更正して会社を継がしてくれ言ったもんだから、二重にびっくり。お袋なんか泣いて喜んてた。

マスター : よかったですね。

男性客 : それも全部華子のお陰ですよ。誰がなんと言っても聞かなかった僕を更正させた女性だから結婚話も即OK。

女性客 : この間私の田舎に挨拶に来てくれたんです。

マスター : そうですか。

男性客 : 挙式は来年の春に決めました。

マスター : その時は私にもぜひお祝いをさせてください。

女性客 : きっとたくさんの方が来てくれるのよね・・・

男性客 : ああ、家は親戚が多いし会社関係もあるし・・・どうしたんだ華子？

女性客 : そんな偉い人達ばかりの中で、私をあなたにふさわしいってみんな思ってくれるかしら？

男性客 : 心配ないって言ってるだろ。

女性客 : 学歴も家柄もない私を・・・

男性客 : そんなの関係ないって。そんなこと言えば俺も周りに威張れるような経歴なんて1つもまだないんだから。

マスター : そうですよ、華子さん。結婚は二人のこれからのスタートなのです。スタートだから何もいらなくていいのですよ、ただお互いを愛し合う心と信頼があれば、後は幸せは自分達で作っていくものですから。

男性客 : そうだよ！

女性客 : 幸せは自分で作る・・・

(PLAY 5)

男性客 : 今日これから六甲山にある別荘に二人で行くんです。

マスター : そうですか。

男性客 : 昔祖父達が住んでたんですけど、街から遠いので今は別荘代わりにしてるんです。1度華子が行ってみたいと前から言ってたものですから、この週末にと・・・

マスター : 今日から3日間?
男性客 : ええ、そこで二人で将来の方針をミーティングしてこよう
と思います。
女性客 : マスター今何時かしら?
マスター : 10時を少し回ったところです。
男性客 : そろそろ行くか?
女性客 : じゃこれ飲んじやったらね。
男性客 : 俺はもういいよ。
女性客 : ダメよ、これは二人のお祝いにとマスターが作ってくれた
特別のカクテルなんだから。
男性客 : そういえばきれいな色だな。なんて名前なんですこれ?
マスター : シンデレラ・ロードと申します。
男性客 : カッコイイ名前だな。
女性客 : 味だって最高よ。
マスター : でもご無理なさらなくても・・・
男性客 : いいえ、いただきます。(飲む) うまい。マスターお心添
えありがとうございました。
マスター : 恐縮でございます。
男性客 : さあ、行こうか・・・あっ。
女性客 : 大丈夫?

S E グラスの割れる音

男性客 : あ、すみません・・・
女性客 : いいえ、私の肘があたったんです。ごめんなさいマスター
、きれいなグラスが・・・
マスター : いいえ、それよりお怪我の方は?
女性客 : 大丈夫です。

(PLAY 6)

S E ドアの開閉の音

マスター : 大丈夫でらっしゃいましたか？
女性客 : ええ、助手席に入ったらダウンしました。もともとお酒飲めない人なんです。
マスター : 無理におすすめして申し訳ありませんでした。
女性客 : いいえ、お礼を言わなければならいのは私の方です。
マスター : お礼？
女性客 : さっきマスターの言葉で、私勇気を持ってました。
マスター : ？
女性客 : 幸せは自分で作るものだって・・・
マスター : そうですか。
女性客 : 決心がついたんです、私。これまでの私は、幸せからは本当に縁遠い人間だと考えてきました。ひよっとするとこの始めてきたチャンスもみすみす見逃していたかもしれませんが、でも、マスターの言葉で決心がついたんです・・・
幸せになろうと、誰にも邪魔をされず、自分の力で・・・
マスター : 邪魔をされず？
女性客 : いえ、言葉のアヤです。
マスター : がんばって下さい。
女性客 : ありがとうマスター。
マスター : お車の方、大丈夫ですか？
女性客 : 私は平気、九州オナゴですから。
マスター : そうですか。
女性客 : じゃマスター、行ってきます。
マスター : 行ってらっしゃい。
マスター (N) : そのときの華子さんの笑顔に、この後の悲惨な事件がどうして想像出来ましたでしょう。華子さんの言葉の片隅に私が、もし気付いていれば・・・刑事さんが訪ねて来られたのは翌週のことでした・・・

つづく